

# 乳幼児の活動意欲を育てる保育環境

—身近な「ヒト」「モノ」とのコミュニケーションを通して—

椛 島 香 代\*

## I, はじめに

保育現場においては、0歳から2歳の乳幼児を「低年齢児」「未満児」「乳児」などと呼び、保育者は3歳から5歳の幼児とは質の異なる配慮を行っている。0歳から2歳という時期は人として社会生活を営む上で欠かせない基本的で重要な発達課題を担っている。運動側面からは歩行の獲得、生活自立面では、排泄、食事、睡眠の自立、言語面では初語の表出から簡単な会話の成立、など課題は多々ある。それらは身近な大人との良好な関係を軸に獲得されていく。大人が乳幼児を養護し保育することによって、乳幼児の発達が促されるのである。なぜなら乳幼児は身近な大人への基本的信頼感を獲得し、それを基盤にしつつ自身が身の回りの環境に働きかけていくことによって、環境と相互作用を行うことによって、発達していくからである。0歳から2歳の乳幼児にとっては身近な大人がどのようにかわるか、乳幼児の身近な環境がどのようなものであるかがその発達を考察する上で重要な視点となる。

これを保育現場に置き換えて考察する。乳幼児と保育者とのかかわりの質が重要であることはいままでもないが、さらに保育環境への配慮も欠かせないことを示している。保育者は、乳幼児の月齢や個々の状態を把握した上で、適切な環境構成を行い、自らも意図的にかかわり援助していく必要がある。

一方、保育所における低年齢児の保育は、大変ニーズの高い状態が続いており常時定員いっぱいに近い状態の中で、保育者は一人ひとりの子どもとのかかわりを保障するために様々な工夫を行っている。また、幼稚園においても満三歳保育（学齢では2歳児学年）が一般化し、今

---

The educational environment to grow up exploratory behaviors

\*Kayo Kabashima

Correspondence Address: Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,  
1196 Kamekubo, Fujimino-Shi, Saitama 356-8533, Japan

Accepted November 22, 2005. Published December 20, 2005.

までにはかかわっていなかった低年齢の幼児の保育について検討することも多くなってきている。0歳から2歳の乳幼児の健やかな発達を促すために保育環境はどうあるべきであろうか。

本研究においては、0歳から2歳の乳幼児保育について、彼らの身近なヒトやモノとのコミュニケーションの実態を明らかにし、保育現場における環境構成のあり方について考察していく。よって、以下「乳幼児」とは、0歳から2歳の低年齢児を対象とする。

## II、保育現場における乳幼児と身近な大人とのかかわり

乳幼児は、身近な大人に養育されながら、徐々に自分の世界を広げていく。これは、身の回りの環境への理解を深め、広げることでもある。その根底には、養育者に対する信頼感がある。「ヒト」への信頼を育み、その人とかかわりを起点としながら身の回りの環境に働きかけ、相互作用し身の回りの様々な事柄を理解していく。つまり、乳幼児は周囲のヒトやモノとのコミュニケーションを通して成長するのである。

家庭で基本的に一人の養育者によって育てられる乳幼児とは異なり、保育所などの保育現場で育てられる乳幼児は、保護者、複数の保育者など、はるかに多くの大人とかかわり養育されながら成長していくことになる。一方、身近な大人に対する「愛着」の形成は、乳幼児の人間関係の発達にとって重要であり、保育現場においては乳幼児の「愛着」形成対象について意識しながら保育していくことが必要となる。

保育現場においては、0、1歳児クラスでは、主にかかわる保育者を決めた「担当制」をとったり、同じ保育者が受け入れをできるようなシフト体制を組んだり、様々な工夫が行われている。ある特定の保育者とかかわりを大切にしながら、徐々に他の保育者とかかわりへと広げていこうという配慮である。乳幼児は、自分の好きな保育者を少しずつ意識し、保育者の顔を見ると笑顔をみせたり、保育者の姿が見えなくなると後追いするなど、「愛着」を形成し、保育者に養護を受けながら安定した生活を営むことができる。

このようにして乳幼児は、身近な大人に対する信頼感を育み情緒の安定を得る。保育現場においては、まず保育者との信頼関係を築き乳幼児の情緒の安定を図ることが第一のねらいとなる。それは、乳幼児が快適に生活できること、乳幼児の健全な発達を促すこと、両面において基盤となるものだからである。情緒の安定を得た乳幼児は、自分の身の回りにある人や物に対して興味、関心を持ち、自ら働きかけようとする。乳幼児本人の興味、関心、乳幼児の身の回りの環境の応答性、それぞれが影響しあって乳幼児の発達を促していく。両者を結びつけることが、保育者の重要な役割でもある。乳幼児一人ひとりの興味、関心の度合いや方向を探り、行動を引き出すような環境を用意するのである。

保育者は、乳幼児との信頼関係を基盤にしなが、一人ひとりの興味、関心を育て、魅力的な環境を構成していく必要があるのである。

### III, 乳幼児の探索行動の重要性

乳幼児の行動は、年齢、月齢が小さいほど、その行動は偶発的であることが多い。3ヶ月の乳児が、たまたま手を動かした場所にあるハンカチを握り自分の方へ引き寄せる、振り回す、という行動が、ハンカチを振って遊ぶ、という乳児本人の意図的な行動へ発展することなどである。また、初めての寝返りも、自分のそばにあるおもちゃを取ろうとして思わず身体が回転することで起こる、ということも少なくない。この偶発性を保育者は見極め、乳幼児自らが行動を生起するような環境をつくる必要がある。

一方、昨今の教育について、「ゆとり」の見直し、総合学習、体験学習の重要視、などさまざまな取り組みがなされている。子どもたちに学ぶ意欲、自らが主体的に学ぼうとする態度を育てることは教育者にとって、これまでも、そしてこれからも大きな課題である。このような意欲、態度は、子どもの日常生活すべてを通して培われるものであり、ある場面、ある活動に特定してなされることなどありえない。子どもの生活そのものを分析し、考察、検討することが必要なのである。保育現場においても、乳幼児のおかれている環境を見直し、どのような体験、経験が可能であるのかを検討する必要がある。

乳幼児は、行動半径も狭く、自らの運動能力も未熟である。乳幼児を取り巻く環境に制約があることを踏まえ、身近な環境を整え、魅力的にする必要がある。乳幼児自らが行動を生起し、環境にかかわるような状況を作り出したいのである。そこで、乳幼児の探索行動に注目することにした。乳幼児がどのようなものや状況に興味を示すか、環境とのコミュニケーションの起点を探ることで、その環境について検討することができるのではないかと考えた。

### IV, 乳幼児の「探索行動」を捉える具体的視点

本研究においては、「探索行動」を誠信心理学辞典より「生活体が新しい環境におかれるとき、その環境を見回し、かぎまわり、歩き回って調べること」と規定する。乳幼児が初めて見る人の顔や玩具などのものをじっと注視する、動くヒトやモノを追視する、乳幼児が人見知りをして保護者にしがみつきながらちらちらと辺りをうかがう、初めて入った部屋をきょろきょろと見回し、あちらこちらに動いてみる、などいずれも探索行動であるといえる。乳幼児の身の回りの環境刺激は、乳幼児の外界への興味、関心を育て、環境との相互作用を誘発する。この探索行動こそ、遊びのきっかけとなり、自ら学ぶ力の原点であり、乳幼児の成長、発達を支える原動力となると考える。つまり、探索行動を多く引き出すような環境とはどのようなものであるかを考えていかなければならないのである。

さて、ここで、保育環境について考えてみたい。保育者は乳幼児個々の生活リズムをつかみながら柔軟に対応したり、できるだけ一対一のかかわりを持ち、より家庭での養育環境に近づけようと工夫、努力をしている。では、物的環境についてはどうだろうか。家庭においては、様々な物が身の回りに置かれ、保育現場よりもある意味雑然としている。それが乳幼児にとって刺激となることも少なくない。行動が偶発的に引き起こされるきっかけになりうる刺激がたくさんあるともいえる。例えば、オムツを換えた母親が乳児のそばに予備のおむつを置いておいたのに手を伸ばす、兄や姉がころがしたままにしておいたおもちゃで遊び始める、などである。

一方、保育現場では、保育者によって、環境が整えられる。生活、遊び、睡眠など場面に応じて、保育者は雰囲気づくりや物の出し入れなどをコントロールしている。家庭と比較すると整然とした環境がつくられているといえる。しかし、遊びの場面について考えると、保育者があまりにも熱心に整えすぎていないだろうか？ 転ばないように、躓かないようにと言う配慮のもと、床にあるものを次々に片付ける、乳幼児の目の高さを考えて、その高さに何でもあわせて配置する、などである。環境を整えると言う名目のもと、探索行動を促す機会を奪ってはいないだろうか。熱心に環境を整え、乳幼児にかかわることで、乳幼児自身が十分に環境に対して探索する機会、自らが行動を起こし、環境とかわる場面を見落としていないだろうか。

保育者は、乳幼児の探索行動を引き出す環境を構成するために、その行動をよく観察する必要がある。乳幼児の遊び始めに注目することでそれぞれの興味、関心の方向を的確につかみ、より効果的な環境構成を行うことができるのではないかと考える。そこで、乳幼児の遊び始めの状況を観察・考察することにした。

## V, 観察事例

探索行動を観察するためには、情緒の安定が欠かせない。乳幼児が安定した状態で外界つまり、環境にかかわっていく姿を観察するために、本学施設にて、自然観察を行った。本学では、保育実践研究センターとして、平成16年度より、対象を低年齢の乳幼児をもつ親子を中心とした施設を開設している。ここで、自由に遊ぶ乳幼児の姿を自然観察し、その探索行動、「遊び始めの姿」を記録していった。保護者と共に来所するため、基本的に乳幼児の情緒は安定している。乳幼児の視線、行動、発語、そして、母親、その場にいる人とのかかわり、ものとのかかわり—コミュニケーション—を中心に記録した。ここでは、代表的な事例を取り上げ考察していく。

### 〈事例 1〉

母親同士が知り合いで3組が一緒に来所した。Aは、その中の幼児である。年齢は1歳10ヶ月

月。母親同士がおしゃべりに興じていて、あまり積極的にAを遊ばせようとするかかわりはない。母親が手に届く範囲にあるおもちゃをAに示したりしたが、Aもちらりと目は向けるもの手に取ったり、遊んだりはしない。母親の膝に自分の手を置いて寄り添うように座り込んでいる。Aは少しずつ身体の向きを変え、母親と背中合わせになって、周りに目を向け始めた。他の子どもが持っている電車をじっと見ている。たまたま電車をつなげて引っ張っていく過程で、一両が置き去りになった。Aから1mほどの距離であったが、ちらっと母親の方を見てから素早く取りに行き、電車をつかむと母親のそばにまた戻った。手に持った電車を母親にみせる。母親が「あら、電車があったの。よかったね」というとAは満足そうに眺め、床の上で動かして遊び始めた。やがて、あちこちに散らばっている電車を自分で集めてきて、電車をつなげて遊び始める。

このAは、その後も継続的に来所したので、観察を続けることができた。週1回程度の来所であるため、初めの1ヶ月ほどは、前述のように、しばらくの間、母親のそばでまわりを見ていることから始めたが、次に、自分の近くにあるおもちゃに手を伸ばす、入ってきたときに目についたおもちゃを手取る、といったものへのかかわりが積極的になった姿が見られるようになった。

2ヶ月目からは、棚においてある玩具を見に行ったり、それを自分で取りだして遊ぶようになった。現在は、スタッフにもにこにこしながら愛想を振りまきつつ入室し、初めから母親から離れて、自分の遊びたいおもちゃを探しに行くようになっている。

#### 〈事例1・考察〉

母親を「心理的基地」として、母親の膝に自分の手を置いたり、背中合わせに接触しながら、自分で情緒の安定を図っている。初めは寄り添うようにぴったりくっついて座っていたところから、徐々に母親の顔が見えない状態になる背中合わせになっていく。場の雰囲気徐々になじみ情緒が安定していく過程が示されている。また、この行動は周囲の状況に興味をひかれ、よく見たいというAの内面を表現しているともいえる。

この事例では、たまたま母親が他の大人との会話をしていたため、積極的にAに遊び始めるようにかかわらなかったが、このことが結果的にAに十分に周囲を観察する時間を保障した。視覚、聴覚による探索行動は、一見すると「何もしていない」ようであるが、実は乳幼児の知的発達に重要な効果をもたらす。乳幼児は、みること、きくことによりたくさん情報を受け取り、整理しているのである。Aの視線も、おもちゃや他の乳幼児に忙しく動き、自分の興味のあるものに対しては凝視する姿が見られた。電車のおもちゃなどは、使って遊んでいる幼児をずっと目で追うなど、旺盛な好奇心を示している。よくみていたからこそ、一台だけ置き去りにされた電気に気づいた。その電車を取りに行くとき、母親をちょっと見るなど一瞬躊躇をみせたが、分離不安よりも興味が勝っていた。その前に身の回りへの視覚、聴覚による探索を十分に行ったことで、今自分のおかれている状況に対して安心感を持っていたのである。

この事例から、次のようなことが言えるのではないか。乳幼児にとって、心の拠り所となる（心理的基地）大人の存在が重要であること、環境に対して自分で納得いくまでみたり、きいたりして探索しておくことによって、その後の行動の積極性、つまり環境への働きかけの動機づけが異なってくること、である。

#### 〈事例 2〉

母親が家にはない玩具（木製パズル）をB（1歳2ヶ月）にみせている。「これ、おうちにないねえ。Bちゃん、これおもしろそうだね。やってみようか。」Bは、母親にみせられてその玩具に目を向けるが、すぐに別な方向を見ている。視線を追うと、大型ブロックで遊ぶ子どもたちがいる。母親はBの視線には気づかず、盛んにその玩具で遊ぶように促している。Bは、母親からパズルのピースを受け取りはするが、はめ込む場所を自分から考える様子はなく、そのピースをじっと見るのみである。母親が「ここじゃない」などと促すと、ゆっくりした動作ではめ込むが、入ったことに対して喜びやおもしろさを感じるような笑顔はなく、無表情なままである。何度かこのやりとりを繰り返すが、パズルを受け取ったまま母親に促されてもはめ込むことをしなくなったので、最後の方は母親が仕上げた。

その後もBは、母親に勧められた玩具を使って遊び始めるが、母親からのかかわりにこたえる受動的な遊び方で、自分から手に取ったり、試したりすることはない。時々視線は、他の乳幼児の方に向いている。

#### 〈事例 2・考察〉

大人が乳幼児にできるだけ多くの「教育的刺激」を与えたいと考えることはよくあることである。「よい」刺激をたくさん与え、様々な能力を開発し伸ばしたいとは教育にかかわる者誰でもが考えることである。この時、刺激の受け手である乳幼児がどのような状態であるかを吟味しなければ、文字通り「肩すかし」になってしまうことも少なくない。この事例はまさにそのような例である。

母親はBがどういう心理状態にあるのか、何に興味を持っているのか、全く関知していない。自分自身の興味で選んだ玩具を一方向的にBに提示している。Bは、拒否せずに勧められた活動を行うが、実際は無表情であること、自分からパズルをはめ込んでみようとはしないことなど、意欲的とはいえない。自分の興味、関心の赴くままに探索行動を行うことができず、先に刺激が与えられて受動的な行動になってしまっている。よかれと思って与えた刺激が、乳幼児にとっては情報過多の状態になり、乳幼児自身が十分受け取ることができない、つまり期待するような学習効果が得られないという結果をもたらしてしまう。この事例では、最後までパズルをやり返ることができないばかりか、B自身が自分でどこにはめ込むかを考えるそぶりも見せなかった。探索行動は、乳幼児の遊びのきっかけになったり、遊びを持続させる要因となり、つまり環境について学習する際の動機付けとなるのである。

このような点で、乳幼児期の探索行動をできるだけ妨げないこと、周囲の大人がその方向を確実に把握し乳幼児の関心にあわせた刺激を与えたり、環境をつくっていくことが、自らを成長させる自己教育力を持った人間を育成するために欠かせないのではないか。大人は乳幼児の行動をまず観察する必要がある。自分の期待や思いこみでかかわるのではなく、乳幼児の心理状態を理解しながら働きかけていかなければならない。

### 〈事例 3〉

保育経験のある人が見学に来た。乳幼児が遊び始めてしばらくたつと、床のあちらこちらに玩具が散らばっている。母親たちは、たまたま落ちている玩具を拾って自分の子どもに渡したり、一緒に遊んだり、また自分の子どもが興味を示さないときには、近くにいるよその子どもに「使う？」などと言って渡したりしている。

見学者は、しばらくの間観察に徹していたが、やがて、床に散らばった玩具を元の位置に片づけ始めた。すると、母親たちが「あら、今日はもうお片づけなのね」と言い、片づけ始めてしまった。

### 〈事例 3・考察〉

家庭は、様々な物が置かれ、時には雑然としている。子どもも気の済むまで持っている限りの玩具を出して遊ぶことがある。時間の制約も受けにくい。遊んでいる途中で、食卓で食事をし、またもとの状態のままの遊び場で遊ぶということもある。

一方、保育現場では、保育室が食事、睡眠、遊び、すべての機能を担うことも少なくない。食事時間になれば、清潔、安全上片づけざるを得ない。また、集団で生活しているという特徴も大きく作用する。一人の乳幼児だけの充実のみを追求することはできないのである。お互いの安全を確保しながら、それぞれの遊びの充実を図るために、保育者は環境を整えるなど様々な配慮をしている。使われていない玩具は、床に置かれたままになっていると誰かがつまずくかもしれない、元の位置に戻しておけば、別な子どもが遊ぶかもしれない、など、保育者は細心の注意を払って環境を整えている。

ところが、この環境の整備は、乳幼児が物と偶発的にかかわる機会を奪っているかもしれないのである。本施設で母親が乳幼児を遊ばせているのを観察すると、かなり散らかった状態になっていても実にゆったりとしている。母親の方も、乳幼児と同じように誰も使っていない「あいている」玩具と偶発的にかかわっているようにすら見える。

保育者は、保護者と比べると乳幼児に「育児」としてのみならず「教育的」にかかわる姿勢が強いと思われる。当然、環境への考え方が母親とは異なる。保育者は、乳幼児が過ごす場を「教育環境」としてとらえ、構成することを常時念頭に置いているのである。環境を管理する、といってもよい。この事例は、その立場の違いが明確に現れたと言える。

乳幼児の遊びを考察する際、偶発的な行動を引き出し、遊びにつなげるのも保育者の大切な

役割である。保育環境のとらえ方、環境構成のあり方、再構成のあり方等、見直していく必要がある。

## VI, 保育との関連における分析・考察

先の事例をもとに、乳幼児の探索行動を引き出すために保育現場ではどのように環境を整え、保育者はどのような配慮を行うべきであるのか、分析、考察していく。

### 1, 視覚・聴覚による探索行動の意味について

まず、探索行動の意味について考える。母親のそばにいて、基本的に情緒が安定している幼児でも、その子によって、場に慣れていくことに時間がかかることを示している。「みる」「きく」といった行動は、受動的であるが、実に様々な情報を受け止めていると考えられる。今自分がいる場が安心できる場であるのか、魅力的な場であるのかを見極めているのである。事例1では、母親がおしゃべりに夢中で積極的にかかわらなかったことによって、結果的に幼児が自分のペースで気の済むまで目や耳での探索を行うことができた。

事例2では、母親が幼児自身が遊び始めるまで待つことができなかった。保育現場においても、乳幼児の行動を「待つ」と言うことはむずかしい問題である。遊び始めない幼児がいると保育者としては大変気になる。保育者が何も働きかけをしないのは放任しているかのように感じる。罪悪感さえ持つ保育者もいる。つい、いろいろな遊びや玩具を提示して、何に興味を示すのかを試してみたいくなる。しかし、この「遊び始めない」という行動を注意してみていくと、A（事例1）の事例のように探索行動を行っている場合も少なくないのではないだろうか。遊び始めるきっかけを自分でもつかもうとしているのであり、保育者は焦らず見守ることも必要であると考え。自分で選び、自分から始めた遊びは、多少の問題が起こっても持続して取り組むことができ、また充実感、満足感も大きい。周囲をじっと観察している行動も、乳幼児にとって重要な探索行動であると捉え、さらに環境とコミュニケーションを行っている捉えたい。保育者は乳幼児がじっくり時間をかけて周囲への理解をしたり、「みる」探索行動を保障したい。

乳幼児のこのような一見受動的な探索行動は、実は乳幼児自身の気持ちの安定を引き出すことともつながる。自らのペースを保育者に受け止められ、認められることで乳幼児は環境に対してだけでなく、保育者自身に対する信頼も育むことができるのではないか。

また、やってみよう、試してみよう、おもしろそうという遊びへの意欲を育てるのも保育者の大きな役割である。動き出さない乳幼児をただ見守るだけでなく、一方では、魅力的な環境を整えたい。何をどのようにみせるか、ということを含意するのである。そのためにも、乳幼児が何を見て、何を感じているのか観察し、理解しようとする視点が不可欠である。教材の種

類、数量、置き方、使い方、遊び方、など検討し、さらに乳幼児の反応を確かめながら再構成していく必要がある。

## 2、環境整備について

次に、環境を整えることについて検討する。本学施設においても、親子の来所前は、整理整頓がきちんとなされ整然としている。しかし、乳幼児が来所すると、あちらこちらに本や、玩具が散らばっている状態が起こる。身の回りに雑然とおいてあるものに対して「たまたま」興味を持つ、かかわりを持つ、という行動は、起こりやすい状態であるといえる。

遊びは、もともと環境からの刺激によって偶発的に起こることも多い。乳幼児では、特にその要素が強い。手を洗っているうちに水遊びになる、アリの行列を見つけてずっと見ている、などである。環境とかかわる機会をできるだけ増やすために、保育環境はどうあるべきか、検討する必要がある。保育者は、自分の意図を持って構成した保育環境が、実際にどのように乳幼児がかかわるのか、柔軟に理解し、とらえようとする視点を持ち、乳幼児の行動を観察しながら環境の再構成を行うべきである。

保育計画・指導計画において、保育者は多様な活動・遊びを用意している。乳幼児では、保育者の与えた遊びのきっかけや刺激が保育者の意図する方向とずれて行ったり、予想と異なることも多くある。保育者は乳幼児がその遊びをすることによって望ましい経験ができていのかという視点で評価を行い、自らが用意した活動・遊びにあまりこだわり過ぎない柔軟な態度をもつことが必要ではないか。このことが、乳幼児自身の遊びのきっかけを大切にし、自らの探索行動から出た遊びを保障し環境とのコミュニケーションをより持続的に、集中して行うことを援助することとなると考える。

保育現場は集団生活である以上、家庭と同じような環境にすることは不可能であるが、保育者は、日頃自分が「環境を整える」と思いこんでいる状態が果たして乳幼児の探索行動を引き出すものであるかを見直す視点も必要である。

## VII, まとめ

以上、乳幼児の探索行動を促す環境について、乳幼児と人、物とのかかわる事例分析を通して考察してきた。人間はもともと好奇心の固まりであるともいわれている。特に乳幼児は身の回りのありとあらゆるものに興味を示し、みる、きく、なめる、さわる、など五感すべてを駆使してどのようなものであるのか確かめ、理解しようとする。乳幼児の遊びはそのまま探索行動であると言っても過言ではない。この意欲的な行動を損なうことなく、環境への信頼感を基盤に、身の回りのヒトやモノとコミュニケーションを取り、自らを育てていく力を持った乳幼児を育む保育を考察していく必要がある。

乳幼児の活動意欲を育てる保育環境（椋島香代）

本研究においては、乳幼児の視覚、聴覚による探索行動を意識する、みる、きくなどの受動的な探索行動を認め十分に保障する、保育者は、乳幼児のみる、きくなどの探索行動の意味を理解しその状態を把握する、保育環境を整える意味を見直す、など明らかにしてきた。

今後は、さらに乳幼児の探索行動を観察し、保育者の具体的な援助、指導の観点からも考察していきたい。